
転々とする思考の中で....。

林檎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転々とする思考の中で…。

【Nコード】

N5225B

【作者名】

林檎

【あらすじ】

何気ない日常。そんな中で私は思考を転々と巡らせていく。それは自分ではコントロールのしようがない。

寒い、足が寒い、と思った。

どうせもうすぐバイトなのだから、と先ほど買い物から帰って来てヨソユキの洋服を脱ぎ捨ててパンツ一丁で20分も過ごしている。だから寒いのは当たり前。だって冬なんだもの。

紫の小さなパンツ一丁でマクドナルドのポテト、今日の私の夕食（兼昼食）を食べた。私は食べるのが驚く程早い。友人に言わせると咀嚼が早いのだそう。だから知らないけど、一気にお腹が膨れる。タイトなジーンズなんて履いてたら、落ち着いてご飯も食べられないのだ。

だからパンツ一丁。

先ほどデパートで買った『リリー・アレン』のCDがBGMとなつて、一人ぼっちの部屋に流れている。

足が寒い。

寒いなあ、もう。

だって暖房もつけてないからね。

私には変なこだわりがある。こだわりが強い人間なのだ。

だから、今みたいに一度決めたことは、それがどんなに理不尽でも非合理的でも決して折れない。だから今はスウェットを履かない。

バイトまであと一時間。家を出るまであと30分。

落ち着かない。

何をして過ごしたらいいのだろう。パンツ一丁で。

あ。思い出した。そういえば『山田詠美』の本を二冊買ったんだ。…ん？そもそも私は今日なんで買い物に行ったんだっけ？

CDも本も買えて、そりゃあ嬉しいけど。なんか足りないような…。私は何かを求めてデパートに行ったのに。何を買うつもりだったんだろう？煙草を吹かしながら、

「あ。そんなことより…」

と台所に立つ。

医者からもらった薬を飲まなければ。

本当は朝夕二回飲むのだけど、私は朝ごはんを食べない人だし、たいてい今みたいな時間（午後四時）と深夜に飲む。

小さな二つの粒。

これが本当に私を楽にしてくれるのだろうか？

医者はこの薬の他に『睡眠導入剤』というものも処方してくれた。

「これは睡眠薬とは違うからね？」とひどく念を押された。

私が自殺か何かするとも思っているのだろうか？ふふつ。

薬を飲んで元居た場所に座る。

コロコロローラーでいつも綺麗にしている絨毯。髪の毛が一本でも落ちていると許せない。

『リリー・アレン』の緩やかで流れるような静かな音楽が、とても心地良い。

…もうすぐバイトだわ。

卓上カレンダーは今日に丸印をつけている。

なんて寂しいカレンダー。

仕方ないか。だって私が寂しい気持ちでいれば、私の持ち物は全て寂しさを帯びてしまうよね。

昨日は別のバイトに行った。私はバイトを二個掛け持ちしている。ひとつはウエイトレス。もうひとつは夜のお仕事。

昨日は夜のお仕事の方だったのだけど、何故か客にひどく叱られた。その老人の顔が真つ赤だったのは、怒りからなのか酒のせいなのかは分からなかったけど。

だって、おじさんと体をくっつけてチークダンスなんて、どう考えてもあまり気持ちの良い物ではないよね？

だから老人男は私にひどく怒った。

家に帰ってから、私はとても鬱だった。薬を飲んで少し落ち着いてからお風呂で体をゴシゴシ洗った。

ああ。もうすぐウエイトレスの時間。

バイトというのはどうしてこんなにも身体を気だるくさせるのだろう。どうしようもないのに、もがいている自分が居る気がする。

そういえば私は本当に買い物が大好きなのだけど（だからバイトをしているのだけど）、同時に買い物上手だと自負している。私が買った雑貨達は見事に部屋にマッチしているし、綺麗に配置されている。まるでそこに来るべきだと決まっていたみたいに、それらはそこに当てはまるのだ。

けど不思議な事に、洋服に関しては別だ。別と断言していいものなのか分からないが。洋服を買った後は、それがどんなにお買い得で自分に似合う物であっても、何故だか後悔してしまう。

为什么呢？

洋服には流行があるから？

なんかその答えじゃ、しつくりこない。

そんな風に思った時。私は今急いで入れたコーヒーを飲みながら考えたのだけど。なんとなくその答えは、私が自分自身の存在価値を見い出せていない事にあるのかな？なんて自己完結させた。

洋服は自分を着飾るものだもの。自分に価値がなければ綺麗にする必要もないものね。

なんて考えながら、ティーカップを机に置いて、化粧ポーチの蓋を開ける『矛盾』した自分がいる。

…矛盾？

化粧すること《イコール》自分を着飾ること？

そんな風に思考は次から次に飛び移っていく。

私はファンデーションで化粧直しをしながら、

「それは違うよな」

とひとりごちる。

化粧をすること《イコール》自分を隠すこと。これだわ。だから私は化粧品を買った後、変な自己嫌悪感に襲われる事がないんだわ。

「…わあ。大変」

急いで服を来て、玄関を出る私。

…遅刻寸前。

時間ギリギリだというのに、なんだか外を走る気にはなれなくて私はゆつくりと歩いている。

かすかに、気付かないぐらいの密かな雨が降っている。薄い闇の中を、いろんな人間が歩いている。

そんな中、私はまた思考を巡らせる。

私、実は『結婚願望』がない。といってもまだ二十歳だから、これから先それが出てくる可能性は十分にあるのだけ。

なんだか、他人と暮らすという事にものすごい嫌悪感を感じる。だって人間は汗をかくし、おならもげっぷもするし、髪の毛が抜けるし、足の裏は汚いし、鼻水は出るし。なんだかそういう、他人（血のつながりのない人）の出すいろんなものが自分の生活の場の空気に混じり合うことが嫌だ。一日二日ならまだしも、それが自分の一生の中に息づいていくと思うと耐えられない。

『気をつけてね』

思考の中に、ふいに混ざり込むように実家の母の声が聞こえた。バイト先であるレストランが視界に入り込む。

（ほんと、少し遅刻かも）

だけど焦りは禁物。

その曲がり角から車が猛スピードでぶつかって来るかもしれない。ゆつくりと、慎重に。

母は毎朝私が学校に行く前に、必ず言った。

『行つてらっしゃい。気をつけてね』

母はどんな気持ちでそれを言ったのかなあ？

だけど、皮肉にもこの間実家に帰った時、私は出掛ける妹の背中に向かって、それと同じ事を言った。

『気をつけてね』

妹が交通事故に遭いはしないか。少しでも慎重になってくれたら、

と思った。

…母もそうだったのかな？

「…あ。」

ピンときた。思考と思考が突然繋がる。

母はいつか死ぬ。

多分私より早く死ぬ。父も。祖母も。妹だって、きっとそのうち何処かへオヨメに行く。

「そうか」

人が結婚するのは、『気をつけてね』を言っためなんだ。言ってもらうためなんだ。一生。

私は非常に穏やかな気持ちで笑った。

精神を大切にすべきか。肉体を大切にすべきか。

それが分からないから私は二つのバイトを掛け持ちしている。掛け持ちしても答えが出ないのが不思議だ。

夜の仕事は精神をひどく消耗させる。したことのある人なら分かるかもしれないが、あれの利点は金が儲かる事だけだ。（まあ、おじさんフェチの人なら別だけど。）夜の仕事は、時に死にたくなるほど私を鬱にさせる。

対してこのレストランのバイト。足は棒になるは、トレーを持つ手は腱鞘炎になるわ、肩は凝るわで。体がズタボロだ。給料は安いし。利点としては、ただ淡々と働いていればいいこと。無理して他人と会話しなくていいし、こうやって好きな事を考えていればいいのだ。…結局、お金を稼ぐのはなんにしても円満ではない。

他人の食い散らかした食器を片付けながら、私はため息をつく。

あ、因みに私は本を読むのが好きだ。

…だけど、時々分からなくなる。本を読むのが好きなのか、本を買うのが好きなのか。

私の部屋の本棚は自慢だ。たくさんの本が作者別にきっちり並べて

ある。

時に誰かがやって来て、ふいにそれを崩したりすると非常にイライラする。まあ、それは本に限ったことじゃなくて、部屋にある全ての物の配置を少しでも崩されるとたまらないのだ。それら全ては私の決めた場所になくてはならない。ピッタリと。

私の可愛い物達。私の寂しさをしつかりと吸い込んだ愛しい物達。ああ。そうそう。そんな訳で、私は整理整頓するのが大好きなのだ。本もまた然り。だけど、買った本は全てちゃんと読んでいる。読むのも確かに好きなのだ。けどもしかしてそれをコレクションする事の方が好きなのかもしれない。よく分からない。

それでも、本を読むのが好きなのは、本の一頁一頁の文字達が綺麗に並んでいるからかもしれない。文字は均等大きさで、美しく改行されているから。

レストランは混雑して、入口にはまだ入れない客達がたむろしている。土曜日の夜はいつもこんな感じ。

私はうんざりする。

ここに居る時間が永遠にすら感じる。

客が席に着いたら、水を出して注文をとって、厨房から料理を運んで、また下げて。水が無くなっていたら注いで。また無くなったら注いで。客が帰ったらテーブルを片付けて。

半永久的にそれを繰り返す。

次から次に入ってくる客達。

永久的に。

「...あ」

思わずつぶやいてしまう私。恥ずかしくてちょっと辺りを見回す。人間と同じだ。

このレストランは人間の一生をミニチュアにしているのだ。

働いて家に帰って、ご飯を食べてお風呂に入って寝て。また起きて。繰り返す。

繰り返す、繰り返す。

…はあ。

それならこのレストランと同じで、人生にはなんの意味も無いじゃないか。

レストランなんて無くたって困りはしないもの。

レストランになんの意味があるのだろう。

「いらつしやいませ」

ああ。そうそう。私、今年成人式だったのだけど。このあいだ母から送られてきた写真はひどいものだった。全く。あんなものが後世に残っていくと考えたらうんざりしてしまう…。顔は丸いしデカイし。お多福みたいだった。

私は丸顔がコンプレックスだ。もっと尖った顎で、ずっと涼しい顔だったらどんなにいいだろう、と思う。

そしたら今よりは少しポジティブな人生を送れたんじゃないかなあ？何か嫌な事があつたって、『いいわ。私は小顔だもの』ってね。

まあ、そんな事はないか。

「ありがとうございます」

ああ。コーヒーを飲みながら家でゆっくり煙草を吸いたい。だけどバイトが終わるまで後三時間もあるわ。

永遠。

…時間の普遍性かあ。

楽しい時はすぐに終わってしまうのになあ…。

もし私が年をとってつまらない時間を過ごす時が来たとしたら、『あの時は良かった』なんて今を振り返る時が来るのかしら。

だとしたら今のこの時間も一瞬なのかもしれない。

「いらつしやいませ」

四角い窓の外に見える景色は真っ暗で、だけど街灯やコンビニの明かりが照らしている。

なんとなく、林檎が食べなくなる。

喉が乾いているのかもしれない。ずっと動きっぱなしだから。

…あ。

そういえば検便をまだ提出していない。

このレストランでは月に一度検便をしなくてはならないのだ。

提出期限が過ぎていなければいいが…。

近頃ノロウイルスやらなんやらが物騒だから、その辺が厳しい。

…ふう。

そろそろ疲れてきた。

だけど…検便の話でこの小説を終わりにするのはつまらないので、ちよつと別の話をして終わろうと思う。

私の友人の一人に、いつも空を見上げている奴がいる。

泣いている時でも、笑っている時でも、息が苦しい時でも。叱られた時でも。面倒臭くて体がダルい時でも。花の香りの中でも。自分の体臭をかきながらでも。近付いてくる死を感じながらでも。私が部屋の雑貨やCDや本達の上に被ったわずかな埃を丁寧に払っている時でも、そいつは空を見上げている。

「ここで何か変化を見られるとしたら、それは空しかないから」

奴は哀愁めいた表情で、いつかそんな風に言った。

「雲は変わる。雨は変わる。雪も変わる。太陽の色も変わる。風もまた、変わる」

そいつは笑っていた。

私は疲れた時にはそんな、奴のセリフを思い出す。

自分のせつかちさ、几帳面さ、神経質さに疲れてきた時は思い出す。空なんて、いつでもそこにあるもので、私がもしかしていつか結婚したとして、子供や孫ができたとして。例えば死ぬときにもそこに空はある。

なんだかそう考えたら、少しだけ楽になる。リリー・アレンの曲のテンポみたいに緩やかになれる自分がいる。

なんの代わり映えもないレストランみたいな人生でも、空が変化を帯びるなら、ちよつと素敵な気もしてくる。

絨毯をコロコロローラーで掃除しながら、疲れた脚を伸ばして、窓の外の空を見上げてみよう、今夜は。

そんな風に思いながら、

「ありがとうございました」

と、私はいつになく元気に言ったのだった。

（後書き）

感想、意見などお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5225b/>

転々とする思考の中で...

2010年10月17日07時32分発行